舍利風語

全

へ 5
1625

門 利5
帙 1.625

序

昭和十四年拾四月拾日 購入

定利法師語録
抜面を生徒等
の為らへきを
書まとめるものとあり記録
明らかにてこれを
うつしたるなるべし
ゆえに
くの使えなんとて
の文おるべくいらわくさはきるなりとて

こゝて誠なるハ故蒼虬先生生前のかたに
きゝしよし是又世に伝ある物ならを得しまゝ
若年よりハ諸にくしく二先生の同じ調なれハ
たゞ此しき雅ハ一との芳調を一粒の精とし
ならんことを利かれ調と見つれて閲せんこと
初学を友とせんとハなし所中人にゆかりし
冊と匠せんとて我も嬉擂み事よりかたくこまかに
松風見るまゝ浅ましくなりぬ

麦慰舎随筆

○そもそも此世にある事俳諧ならぬハなし表四維
○万象ことごとく俳諧なりされバ俳諧の名目を知らぬ者とても
俳諧の外をはなれて一物も弁理せられしき人を儒門にて聖賢
あるひハ金言名句とて尊れと是を世人にいはせ世人の
聞知し得ぬハなし韓釈せるハ含得を是より則俳諧也
釈門に仏経いひ金紙金泥を用ひられ是また世人の
見知し得ても説法を是俳諧なり神道道学にも用ひし
既に国政を伝ふるにも万業古今外にても通しこゝて文字
本義のかへりみ点せずて八通しこゝれを今用ゆる処の日本語に

漢字をまぜて実安く淡易きやうにして韻状も多き事あり
去う様も此俳諧を神代より始めの事なれども久しく世に
行はれ永く世用を助るものなり上
天子常社御詠より早賤乃為まで俳諧あらぬを
なしよりの時の流れあり世の雅器ふるる迄行事
うたあてはうく有て今おきも今ありてむかしなかりし世を
俳諧なる様をおもふ
○代々乃歌人俳諧乃名目を知らざるいう形をを
○俳諧と云ふ様志ぬ人社多かりしに芭蕉の翁俳諧社
本義を見出し世にある俳諧の句よりまことに魂を入れ
世に弥さる様を
様の花を社多き仰るるれあるが歌も出けるとあるが
右菅家乃御詠なるよりは是俳諧歌なりと後の用法乃
始れ〳〵小雪 是俳諧の詞なり
○日本乃風雅を和歌也 唐土乃詩 天竺の伽陀ハは
かるべからざるなむ面白きことを見出ふ
迄ふ面〳〵さる様と中和歌ハ始あるべし社御詠より
出でを八重垣をなる〳〵月為よりを述る我詞ハ
行ふ人ふ事て題詠哥合なるけ〳〵まの代々の撰集も
事を形れ行く吾國の美事とハあまり多るが業集乃

うちふを貴賤の品あなく紙四種のふるを
を世社事の引をを国和歌は作るとこや中に
より開よむ人乃いろしさまし品を撰むよつけて
社言葉の事うれをよこし今社引のふるきをして和歌の
引といふことをえらみ出し事業定名て板のし流布を
引はくその引をさしも用ひぬるにちんたのぬされを和
歌乃風体を作者を中門を引さ後ハ書ふ事こういろ
うを家をれやうるあるうりさ社和歌作ち者を
國学業選集のうりを学ちねも風情を述る
あるいを士農工商乃四ツ社民のいろ後あき兎ふハ日本う

○寿れおうう傷歌の一ふを言ちんを毫あり程々集あれ
ふうう平男馬ふ社紙社多ふひを中の引る事ちなくふ
時乃拙里より宿ち来る蟬曲情弱の風ひふの乃ふにをふ
て己う風流ハさふにあ一たまし和歌ハ武よふ出るふ社ハ
産業ようれすふ社者ふて和歌ハ　堂上ふ学いふ多ある
豪商富農社職強居の引ふまれを是和歌の引の
定ふて歌学社用あれをなる毫一蕉翁是武歌きて
日本に備へ風雅をりつをふせんと俗侠平作を用ひ
一文不通社単武みふ学ちふるむ毫一

○恐ちのふ名れを

○天子 將軍家 公家 諸侯まてハさゝ波ゝ和歌あてハ生ゝ
仰合しゝ波ゝ給ひ俳諧の御ゝを得ゝあゝ給ゝのゝ廿ゝ外
豪高富農神職隠居遊民のゝ俗ある事ハ俳歌ゝ和ゝを
よゝて面ゝ白ゝ雅とゝ成ゝ乃ゝ分ゝ別ゝ有ゝ俳諧の連ゝ句ゝを
似ゝ合しゝきゝとゝ成ゝて國学ゝ儒学ゝ和ゝ学ゝ有ゝて遊ゝん人ハ御階上
ゝ有ゝあゝるゝ事ゝ也ゝ其ゝ余ゝ四民の風雅ハ俳諧ゝ者ゝ也ゝ

○俳諧ゝ雅ゝを閑雅を昔ゝとゝ成ゝ文墨ゝ蒔絵ゝ墨ゝ塗ゝを用
ひゝて酒食ゝ肴ゝ菜ゝ地ゝ之ゝ物ゝ抜ゝきゝて貨ゝ素ゝを求ゝ買ゝ之ゝす
ゝ遺ゝ書ゝ也ゝ乃ゝ分ゝ別ゝ有ゝ也ゝ

○蕉門ゝ七部集ゝ要文ゝとゝすゝれゝと猿蓑ゝ山ゝ家ゝ俳ゝ深ゝ門ゝ也ゝ

古ゝ今ゝ集ゝ素ゝ堂ゝ社ゝ用ゝ多ゝの日ゝ本ゝ人ゝ也ゝ無ゝ門ゝ弟ゝ
ゝ也ゝ俳ゝ諧ゝ之ゝ道ゝ等ゝ閑ゝ階ゝ榜ゝ と ゝ知ゝ
○故事ゝ と ゝ出ゝ し ゝ 古言ゝ と ゝ用ゝ ゝ 俳ゝ 字ゝ を ゝ 書ゝ ひ ゝ 人ゝ 知ゝ ぬ ゝ 事ゝ を
ゝ 俳ゝ ゝ 蕉ゝ 翁ゝ の ゝ 俳ゝ 意ゝ 不ゝ 遠ゝ 人ゝ 有ゝ 故ゝ 乃ゝ 大ゝ 志ゝ 不ゝ さゝ ゝ ら ゝ ん
ゝ 世ゝ 上ゝ 乃ゝ 雪ゝ 雪ゝ 部ゝ 類ゝ 不ゝ 有ゝ ゝ ゝ 正ゝ 風ゝ を ゝ 信ゝ ん ゝ 者ゝ ハ ゝ 昔
ゝ ゝ 今ゝ 有ゝ ゝ ゝ ゝ 又ゝ 有ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ
ゝ ゝ

○翁迂化乃段ハ 去東之門弟を ゝ ゝ め 素堂大志 ゝ ゝ ゝ と
一 ゝ ゝ ゝ 其角嵐雪我ゝ意地を ゝ ゝ 蕉風ゝ ゝ ゝ ゝ 利

○ 芳雪風伊勢風さうんあるを左注に五色雲あると点ぜる風
不成きうそう一旦舊門をたれる原茂安永乃頃より俳諧
競ひ起りて西風にかくさんすれども和と舊翁義延乃時
用しく人に彩色を結構あるて八寄ふも付ねを多の日毒の日
かくより導き乃ちしに西風を宗く天明寛政文化文
政を経てあるを猿簑蕉俳を作るあり来る茂安永乃
多数日を経て生の多乃百年乃間を文化乃猿簑を捧
きて以くときに猿簑乃ちうに天保に蕉俳を称ふと
いくと蕉俳乃用しうる故なるべし時人用しかねを安
永を安永乃化八文化天保を天保の風俗なり詩乃唐宋
明乃風俗あるを用しされを蕉俳に至りて俗八天保
風体あるべきを平日久しく四海おさやうの多人に厚
く供素篤寵の風乃帰されを取もおさを蕉俳猿簑
集の意味にして西鶴乃研究する以舊翁を極意乃多
きあるべし

○ 天保乃俳諧を連句うるる故事古歌のお木作るを
多あを殺伐を器物を以を使を毎乃徳を用ひを
枕辺のぬ多乃成を研究俳諧乃醜を知を和歌うも
撰集を其代しのさ法を考ふ乃ちより也作者の志を
知ふ乃ちなりを

○去歌ノ乃法則を考へくれ初て出来ぬ
手摩ノ社宗匠ノ徒しまさしく合を為るなれむ他の俳
諧を見ぬ家去歌ノ如くなるべし
○俳諧ノ趣味あるこゝろの俳諧の数句一句乃上もあれ
と連句に茅句ノ血脈を伝へなるこゝろの前ノ去越しの
句乃執着をぬく
麻ノ社ノ一統しむりうや有毒乃手ノ如くなるもむ
見ル程一生の去歌ノ字去あるも拙ノ是なり不能ノ乃
者かゝ伝服ノ為ノ去歌をこゝて乃去歌を考へ
箱生涯去切ノ社炭俵集のうち抜しる社業に

風俗ノ教ノ為ノ社峠後
と云教付句あるを茅ノ茅ノ下より峠ノとノ句出る
次ノ場のこゝろ秋ノ有を此一句ノ二ヶ所情ノ入れる句の
意格別ノ如くなれを其後ノ選集ノ中ノ一ヶ所
千載の恵育を開く為ノ亀鏡ある為ノ
○世ノ季をこゝとノ事ノ歌婦ノ者あるを社ノ法ノ云
ゆむノ如くなるノ如を古集を見る為ノ数句あり定例
月ノ社ノ如くノ如て素秋ノ如くせぬるなりされた月
乃二句月ノ初秋ノ為ノ付られを初秋ノ為ノ付句出る
作ノ有為ノ古集ノ初秋ノ為ノ社句の出る法を見て

案を加へたり

○遠白さいふ事他門ふくも也ふ遠くとふる有んや為云く

○人倫三白はくうそうかくしたと考へ考へ者ありうりあり

作者の所ゝ多し古集ふ一ト活ル足之ゝ稚と俳諧

○ふゝ原へかゝ寸古人の妙要あるを

○月ふ吳名花ゝ花嫁も鯉ふ出ゝ言蝶ふを

あつ赤ゝを皆他ふふあるゝ出て蕉門乃俳諧ふ引て

赤ゝ月を天氣の白出原と花引上ケて付ゝ

志不を考ゝ考ゝ花を出定をあれを出ゝより

公こけて梅ゝ月を出を加又出ふくさほを考ん

歌仙式ゝ七白月月出てあと秋季陰くゝものかを

竹赤月出ゝこの新原あり八白月出なゝゝうゝまあハ

出ゝ原九白月を竹ふゝ花にのゝ赤出ゝうゝ

ゝ月ゝ出ゝ赤ゝ十白月赤花を引上ケ付ゝあり

古人を貞盛の要節を用て要ゝ鄭ふゝゝ

事なゝを立て

かゝゝゝの新肩ふ川紙衣ふ　菊

ゝゝゝゝに立ゝ切ゝ　曽ゝ

夕白ゝ夢ふ地を立る反産為　為有

西日岌岌せく数乃下荷　菊

又

十ら赤曉雪社ちめうれ　菊

小紬の翻乃さそれ落綿　曼丘

又

笠形ちと人ふ有ちの雪　菊

和ら曉火岌ちと松社紫　独處

きかホあるあ雪きりとさ〳〵き雪芦をなけれる

ちるを雪たらりち雪を乃ちれ

花ホ雪道屋考ぬ数の郷　米寿　養虬

ひけちうちちるれたかう松落

時狼毒のちう雪ちをたまちさを又竜のちちを

なちを雑て雪雪形すと難しる者あり是

理屋の海ちく低徘ホ紙炼より出るものくま川眼を

ちてきて其京情を蒙ち雪〳〵迎屋考ぬ菊の俳

孫ちちを雪社ちるさ毎ホあり雪〳〵松乃みちを考

あちり今丁ほの雪きちりと古ちる尺を松根ホ俳

て腰を摩れと朗詠ホあを金く乃情賀題を乃ホ

きを考ちを雪たちり形ちへ〳〵れをを松宝菊ち

よちち蒼虬箱ホら松川ち雪すちを時乃名迎れハ

よく時所を考へるなる歟しと

○花は風付歟のうたとして流あるを是又他にあるべし紅葉の

俳諧はあまりさとくもなく中ほどけやかなと挙て優なり

猪猟や奥下に見ゆる花の裏　泉川

雪ふりつもるを見る春風　路通

又

梦さめて紫雲のうしろ　古芳

ちるまを待すまを乃風　翁

又歌もまたなるあり

三人の猿楽座に花咲る　尚古

八ツ打よりまたふる時雨　翁

又

歌口の花見の連ふ清ましく　性無

日ぐせりの墓しまれる風　野州

但し賀屏ましを遠色あるべし

○安永の頃より蕉門中興し盛ふ成れるあり時の宗匠達

中合し堂上方俳諧の御会と倣し自ら御所の

宗匠撰ふ任じられ形式を加へ式を整へ

執筆社作法に倣ひ是を以来立机追善家見

ホル列席厳重あり是俳諧の盛事まて俳士乃

面を起さるる時に〳〵て祝菊の俳諧とゝのへんさまとゝ
菊を世ゝにて拵の式俳諧あるを事を宮ゝと厨上みく乃
序會まいれゝ〳〵ゝ〳〵あ〳〵全く菊の森意まいゝゝ
面ゝ〳〵是より俳諧を賣てゝ〳〵已ゝ盛をまあ〳〵和ゝを
中ゝ〳〵〳〵ゝ〳〵まとむゝほるやゝゝ〳〵いて見るなり況あを況
ある者形喜来船人のゝゝ吳体まゝ〳〵ゝゝを世難俳
を賣面眛をあゝむき虚名をゝめて作の小堂上ゝ面人
自分花の本宗通の号と免され芭蕉翁小花の本ゝ明和
乃神号ゝ〳〵ゝて世上ゝ流行をかゝ〳〵きゝる芭蕉翁人
一世ゝ明眼を年ゝ風雅のゝゝ〳〵さゝゝゝ四体小弘通ゝを食

弘陀の境界をあゝ〳〵来代乃面民を向上の一路ゝゝ〳〵き
ゝ生高徳成霊ゝ〳〵ゝゝきゝゝゝ何をゝ〳〵已ゝ名利ゝ
かゝゝて祖師のゝ意成吉体事あゝを人をゝて逆倒ゝを
〳〵むゝゝ面ゝ事なゝゝ〳〵

○俳諧ゝ〳〵術ゝて〳〵ゝ運ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人情小人情を
ゝゝ内体ゝ内体成かゝ〳〵ゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝ変化〳〵ゝ成ゝゝ
則吉作をゝゝ面〳〵人情乃ゝ歩絨小系亀を作け景亀の越
小人情を作けゝゝゝ〳〵ゝ変化ゝあ新ゝゝあれゝ彼琴柱
にゝゝゝ世界ゝゝ〳〵ゝ死物ゝゝ面〳〵不能妹ゝて悪ル功の者ゝ
かゝゝ成迹ゝを主源ゝ〳〵吳拵ゝゝ事成吐出ゝて越ゝ切ル

和を出し軍法をいれまてに越をきくものくせをいかに
ものくなり甚ひきやう社姿をまひまてかあるに俳諧堂僧正みを
とれあるを

○三島三木とけの秘伝に決あとやるふくて初元祐和尚
あり西行菩つまを書て菩なたらうとを一面し

○名を実社宣とやうんむ俳名をとれ撰む面れあれとも川ハ
何ものなもつ一かをす点面ルをく形くよをやくかるきを
俗をを面し書ルあ伝ほをいて書ハあし伝を示あ
ゝを実体あるを残めるきやうに名をいろしむをうくかく
者あ理学意をの塩まてよるあぬまの意を俗しあくし

○神仏ふを花々花拝里拝士口あるの俳名をくあるをのあり
生花の摩し揚弓揚浄瑠璃の伝ルあり俗くしなのう
神仏あれを罪ケし切者に舎号堂号を付るホをを
よて事ありるる五文字七文字の号園号ありるるし

○俳名ホ何翁何興あるく自をまるく者あり蛇をうル翁興
をに潜号捕号ををあれて俳祖を翁とあて名事れを
を使ホて遠面あるし俳し選唐古稀の歳を過ホを
俳名の下に翁ををルきをわなし法一字をとりて何翁をう面
うををあ翁興を付けをう保安を名の高を下まの人多
しをめを流切ホをルよあるる面し

又龍學藤勝あるいは家伝残付とう保者を大うさ傍の
作のれるを乗るを武士家多たてら邪路を流るる家あるを
あやまりて付るもあるもあるもむ面〻家ならく伝俗と
賣下者尺八師あるに多くあるとなり
○作例ふ虎屋るもの蕉翁乃俳諧の〻多端あるは迷ひの
経なり経を伝ふ孫唐〻道幼ふ見我者さす和漢の学
者我道ぬきて風雅を伝ふるにあるへし
○一云不乱り妹唐の切をつもうちふ自ものと理をあるる
ふなるものあり向上乃一路よるあると和尚の金言たるとれ
○世俗ふいる雅をいるかたるくるせたり深あるを伝ふてもて

ものある故雅とも跡まても器物ふくふ四うとちうるるを
雅ものと唐物の名を雅物あるいふ日招ちり是ハ
人我乃我ものて真雅あるを雅をもひたるくも
よある字まて天地家物の徳をくあり多踊ふ器と云ふ
なるか雅あり公家を公家の法伝侍を侍乃法伝所人百
姓を町人百姓の法伝あるを雅なり日本の者を日本の
物を唐物ふ雅人形ん唐物を雅とせん雅を俗ふ対し
ていあり俗を形ものせたりあるハせて世ものとちうるを
いやあて者ものと俗ものいなるものもの乃をくあるふ保
らてたくものを雅なりと者保面〻又あるものせてまりなく

事ぶりなどの俗もいやしからぬ後まれも筋ル俗中の
雅を取りて採菜を山吟とし神楽殿を祢宋堂とし
て故事をたくみしのまを雅言とおもつるものを看聞しる俗
後世語を用ひ語ひて書ル西行杜子美は超過せる言
吟を吐ひ人なり

○氣韻風韻も自然のまにまにて其くしの格まくあるあ
ものかなるべしとなれば画ものすべ性氣韻風韻のとのを
人物を侍言なりとされと画風は煩雑をいつくあるべ氣
韻風韻は俗ひ事なり其氣韻風韻を押えて成ものを
又ものなるものと尋ひられて世ものあるべきとされ重ル

ものとあるべきものとされたきものとあるあり素ぬ不思議の
書画茶道具ホル氣韻のあるものまてぬ勢をのるかを
去警定するにル是ルるるり肝要なりとて

○人物樓閣の所りるにせ俗く遠ばけたる伝まて庭中の乃
ものとされル形きれ中勝ま乃方の家社上はあまき絵樹の小
松岩あり色おけまきと言ま社好まて遠ものるかを幹
を作ものを枝を清ひあるハ葉脈の神をかまるめくいるを仁
主社ものとあるるくまし曲節をなしまして画
くれるくてあの発居のやうてあるのの出きりて参らて
中に一ツ社絵をあひ此枝を見るくやたく枝葉すあ

可何のなくいとかなき曲尺ゝ長く孫とゝ代の流りゆく人の
ゝてゝやゝ結ゝくゝ男ゝ乃おゝ却ほゝて結ゝし見ゝ
結れてけゝ幹（ミキ）枝のすゝれゝて何となく風韻ゝゝ加ゝて名て
ゝゝ余ゝ曲尺ある松きやゝて見飽ゝてゝゝゝ出るゝ
ゝなくあるぬゝハつれゝしゝいゝゝる赤寺社かゝゝ乃院ゝ仏つゝ
名ゝとゝゝ乃ゝ芝ゝる所ゝ乃ゝゝ流ゝの同ゝゝを感ゝ
ゝ名ゝゝて

○ある所ゝて結歌の舎あゝ乃ゝ所ゝ左右ゝゝ乃ゝ乃花ゝゝ名ゝ
おゝてゝれゝ所ゝ乃ゝ乃ゝ蓮翹（レンキヤウ）の題ゝ名ゝて
ゝ海ゝし紫ゝ乃ゝて結ゝ乃ゝ未ゝ乃ゝ牡丹ゝ所ゝ

おゝて打白ゝ出ゝて出れゝ名ゝゝゝゝゝ蓮翹ゝ和名の
あゝ名れゝゝゝゝゝゝゝ翹ゝゝゝゝゝ牡丹ゝ所ゝ通
何なり俗語の自由なゝ我ゝ所ゝ

○師ゝゝ所ゝ大ゝ乃得あゝゝゝゝゝ我ゝ紀ゝて門ゝ八
ゝゝれゝ和ゝゝ俗ゝゝ作ゝ定ゝゝゝゝゝ
高名ゝゝ立寄ゝゝゝゝゝ門ゝゝゝゝゝ師ゝゝ
所成ゝゝゝゝゝゝゝ成ゝゝゝゝゝ信受ゝゝ拙ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ余ゝ名ゝゝゝゝ一旦ゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝ作ゝ弁ゝ俗ゝゝれ生涯蟄中ゝ閉ゝれて度ゝ
世界ゝ拙ゝゝゝゝゝ拙き事なりゝゝゝ是ハ我ゝ

師となる人其信をあやまり以て一つる人一つしき事なれは
おほえず他乃術のよしあしは師の弟までおしはかりせよ
いつれとなる人作をも師を学びて我師をたすけんと
乃みな得あやまり者多し たとへ我師たりとなるも
宗匠門下なりといへども本門はいかに其家の我さかえん
又勝劣の一つなる事しかるを達人とさまざまの門を守
まてまつるも一ツ我門にかかはるを廣く学ひて大家をなさ
ぬを謗りて宗の門へ入る我が好む所をも末流の小人なりとて
いりて他門へ入る弟子をも不義我が嵐雪なり此外をよくし
弁へあるへし作つよき其門乃弟我他つまるあるまし

○今何の某庵何の某として俳諧の名家の二世三世とおし
續して権を張る事は門人ら芭蕉翁の本意にはあらざる
事なれと是此道の清の人子成るなれはおのつからものく
いふらしされと名家我号我継んとて遺身のあらざるはあき
境しつゝさまや乞ふ草我活ひし庵号を継も一世限り
不絶るなれは先霊の知りもあるまじなし 末流の弟子師
乃名我継ぐものか門人て賤弟しされと継で立る妻子乃
みな門人もなして庵号我継なる者は是非なれ其他たる事し
○古庵て三郎とて俳諧者多くて俳諧に於てよしよくなし
是我以の事と考るに今の世末熟不鍛錬の下手にて俳諧

師と為れる用ひられを舎席ホ[illegible]のをたうる堂と[illegible]家業を
く俳諧ホ於ふ考より言葉をもさほを[illegible]ほ
ことより又達人上手たりとも家業を加へる者を志ろう
と名付け下堂に篇を[illegible]あ中月[illegible]人よむ[illegible]
ホこたり富家の者を只[illegible]ほとをを得たりをいも
ををとゝいと言堂不般(ブレザル)[illegible]にくして世よこ[illegible]中より以下
乃者をたゝりうゝて休俳と撰歌と家[illegible]ホ於ふ又
為て狂ホの者を家業と於ふく彼の仲間ホ[illegible]あるされハ
俳諧ヲ於ふとは市中中をいと稀なり歌かをうれるとも
あり俳祖芭蕉翁蕪学文育を其位ふちひき田夫野人を

我國の風俗成ものゝ[illegible]ホたるを愛ホたるをいと
かゝをやとを羽を弊ホあゝあまり人まり人の[illegible]あ
あゝ功拙を[illegible]ホ達人を[illegible]の名聚ををちひきて能翁の
風雅弘通をるとをけむ為し

○ある書ヲ曰 旅僧仲の老田舎ホ行雪て一篇ををれるホ
をを老僧ハ何人ヲおのをやと問をれるハ芭蕉翁の跡を
をるハ松島象深ををつゝ風流風雅の乃をををろをを老
をゝと答ふをてを俳諧行脚の者ある此領内ホをを[illegible]
変(チ)ホ俳諧師乃篇ををれ法度なりと云ふとありをれハ
稀をを物をかをあ人をたゝをを考ふあゝと乃西をれと是を

俳諧者小伝之人の琴碁書画を志す諸道小伝あるあ
なの従を和歌技藝乃者より俳諧を始め歩り もる淡き
海まるに至り終と和歌和歌を学ぶ

○扨て社世を幼御あを者蕉翁の行くを学ぶ風雅風流
を志し月花の名境を尋ねあ故人乃事蹟をさぐるハ
名乃ゝ和ゝ高たく豪家拝民をたつね拝里科幣間小類
を保乃ゝ徐まる所を衣体を儲て奥多小飽き淫酒を
ほしいまゝ和ゝ生涯を却る所ゝ大ゝハ陰蔵放蕩の
者ゝなり其中に稀ゝ殺白連白小骨打る者あれと却
ゝ我慢我執より出て人の上ゝ人ゝ名を愛て

名人英哲小准せられんを我新小小る者多し終ゝハ
其骨打ル屋の子孫ゝ永ゝを愛ゝて己ゝ住ゝ形ゝを乞ゝ
乃ゝを世を恨ゝあるハ志鄙ゝ志ゝ何るハ胸痛して世を辞ゝ
ほたゝ死ゝ形ゝ乃ゝ死ゝ又ゝを世ゝ志ゝ多ゝ捨ゝ

○柿蕉翁の俳諧師ゝ成ゝ小因縁を金沢ゝ命ゝ死なりゝ
藤業分家乃君ゝ仕ゝ主君早世小ゝ小ゝ人の殉死に倣ゝ
遁世し佛門ゝ入禅味を味ゝ小是を種ゝて住る小俳諧正
を社門を宗ゝ志ゝ乃ゝ志ゝ乃ゝ生涯を食断
陸の陸り小ゝ貧素を尋ゝ精を我ゝ乃ゝ結書
に挙て世ゝ乃ゝ社俳諧師世超意を継ゝ者ゝ乃ゝ一

風雅の原を糺し風原の誠を古へに求て雅俗を擇て文
家の貧富を其子分業の術をみる所作に能熟しく
終に志而月を以為れあり先を己の業を捨俳諧師と
成る為れとも因縁ありてをかのれを去る為に行くも主家自
家に災害あるとも門人忠孝を尽し一旦再興の志をなすべし
為れなりまし陰り有て事あるとも時的因縁ときなめ通世
して俳諧師に成るとも由来さる為に行くれも俳諧者ふなる者を大
うと敬愛人あれを西法を以るるなり俗俳
作の子を業を継い是因縁を整て俳聖の教を守り風雅の趣を
麦飯舎随筆畢

追加

梅室随筆

○歌人より俳諧をいやしむるを唯俗談平話を以しむるを以しむ物
をたをけて風月のみを用るハ俳諧也世の事をハ雅をあり俗談
あるを字を書る為俗あり是を新しく平話といふ和歌ふを平
よ雅を乃ち我撰を挙て用る俳諧ふをえるをすしるる悪く
用るあるまを俳諧ふを雅を乃ち仕るる白も中をあを

板を手うるあり賤を花ひを
川とあく花ふ茅をり峰の雲
深竹を雲の里あり遠ちを

東の方にあるいてまゐるの由をうけ
たまはりて八重咲の桃の
世數時を全体雅を不して和歌に用ひ侍る一つも
なし雅を成撰ぶるを易く成難き事也
俳諧作ハ所詮世俗を用ふるを易く俗を雅
に用ひなしてこそ歌人も難し是いまだ俗の雅
腫なり

世に和歌ハ社ハと俳諧の沼を別くの中ふ和歌
雅あれとそれうをふ池と

○ふく雪俗をいふ一紙も一首も是成用ひられ侍る

雅たる事あるべからずこの左一所ふ一人の書記
あるべしうの表裏理よしと賞者河内書家老人問ふ
ヲイしと頼ふ時亀を顧ふ世を通り多
路よて御ふあの亀人を文育ふやいふふといく里世老人を
ふくよあるて表裏古紙よりしと呼んふ内より古ほねし
と書きり小時ふかりふ世を切通ん法ふて御ふあ
亀人を俗なるをのこう別と性人やふる亀
○ある呉服店の手代小十歳といふ者あり日ふ我門り
形ふて俳諧乃すれを社ふあるべしの一の日まりてやたれ此
紙を人ふ与能人ふ中付ん此少ふふなりゆてを形雅を

倍止ぬる所の捷まてなくて好きのそふりくともいまおやを
をせ乃ひ系りんと中ぬ所ろ曰所の捷とあれを見紙ふ
及ま寺ま所のう（生頃、若狭）戻と（山田系）戻と　此程きくり
（ふ狭）戻をかひて寺人まて季摩のつくなりを度和を
（ぬ）（田系）戻ら（若狭）の紹分まて又季摩社門ら八
なをんしと所を天下他一乃大任を系りあを菅敷をふ
勲せんとをる人とまらふ一所のを配人ふなりて他徒を止
るを社を天て地無倫の達ひたり他徒を碁ゐ碁生を
乃類ふあ所人情世態まを所ともを和歌ら可つ
うなりるん者紙迫学ま月丁維を者ふ所ふ清能雪風徐と

ら（ア）せをあを（ア）しと立廻る毎〳〵古徒ま曰車伝（ヤル）紙ふ雪（アラ）を
用ひとあを（ア）雪を車社ゐふ法遣りる物ふを（ア）つねとまし紙
軸にぬれを（キヒル）擦るなくゆる中ふ紙をるなり風雅を設るの
ゐふを所ふ社ふをあるねと是伝（クハ）加ふる車ふ油のを〳〵
○連歌を一世百韻と宣法をり他徒ル延宝天和の比をて
一金百員あるを〳〵かとこのくを法日或ハ終所社ふを要ト
く勤仕家業社好るなる毎をあれを者をし典ル
あるふるを京享に組翁弥他の式を者らしふものなる
毎〳〵ましを社世のを〳〵一世ふ毎日かる中社ふ文
に所〳〵法を一所ま一世をなを〳〵所まのをかの文う

そてやうなとある歳をて書る事ハ拍子あるを書よりは
俳諧まさ遠くとも雖時までに法尾ハ家を社なりさる
ものを社やうに五ツ七ツ薬を書る條なハ白薬より時と
うたをを席上の妨なりよりあるに一ツ仕ハ出と事ハるの
姿勢を生時乃機嫌よりる事ハ中附白あるとさるを
他よりて附切成儀ハ事ハ社世を吹を云席
にもを家時の能ハ古あ歳都て席上の俳諧を席俳諧と
名付て云ハ少しを往言(タヘコト)を付ちて早く終る歳ハ俳諧と
を家あり男ハ古代の人を和歌より席ハ仕ちあるを
案するに到る名の京良(教)石六年の数つよハ達者

にあるを必定ハりを社和歌ハ書ハ紙ハ乃ハいあ乃ハえ
書を社ハ乃歳ハをハるハいハるハなハをハを屏歳ハく
るハをハくハりをやたをハハ乃数を俳を社ハ付ハ仕ハ乃ハもハまを
書ハ歳ハ事ハ仕ハを社ハ家月を仕ハ乃ハ俳味を書ハを
いハを生涯ハ懸ハ事ハ法義ハを一旦報苦を経ハれ
を蓮奥を寃ハ事ハあハ事ハ家ハ

附ハ乃ハ時ハをハより五ツ七ツハ薬ハを云先ハり
赤ハあを粗案ハを行ハを空的ハ乃ハ只一ハ乃ハ文を
社ハを家ハなハを五ツ俳ハ力を一ハ乃ハ言ハ事ハ仕ハ家

橋室法筆平

附録

蒼虬翁遺事

○世の素人藤井氏の家に於て打囲の席にて
俳諧まて挑灯の中に婦人うりむ古代の雅おくとらくと此連句
探もめてこそむる優成面しいの中もして挑灯しまんと法師あり
世を去面みて色をかるつ死を形きを方中きうんとしるるすを遠
つ中りたれといるまおんにを面のみて見事なれとまうをし
見ばうちふを者きまきるへ此理俳諧する公相を面しと云里
○何方社集中おや
行ぞ去れ乃行あして

とそふ付るあり門人集ちふ面ふしと云るふ世をれを
行の面ふれまや汝の面ふきとしを曲者あるへ洛の面ふき
行るをあるに世を辞ある我面ふしとをれ又路うれと面ふ
しとしを見をふ者れ見俄ふ沙井なるへ
○世来ぬしとしをのあを見ハせぬ有ちを来ぬとをなし此
理何をれあるを
○おをを世書お弱より五ちへ井をて俳諧を立るを
山をりに岸へ陸世を探をれ
此服十二三る素しせしるを我見ををを又世る牛世をを
見を侍又二三十ら素しせ素をやをりをしを

廷臣原宗申社刑斗になりて者相氣を原ひく大
津の玄井某来りて山上成字を彫り社係中を見えて
かりて其内よりあるべし系一二を挙て作小倫せんと則ち
多くの中より五三の幾拔出し曳の前へ拔出を彫りより
数多の組いまを付るよりと某り見出す伝二三あり是を
見るしと去まふやと曳ひしとて皆わるし岩の撰を
付けるり山盛といふ事明る社皆なり是を付さんかい
山盛社位あるべきと論者用ひて去る
○あるべく自分数度案じて出さんと曳うてそれ成るべく
うるて曰此案いのふもむつう悟のこと位なし作者

見せ法くと曳曰見れそれ意を付を汝ら案じる程
案じたるを付く面しと法なるうか
○曳自分幾度も見せ法るは其自筆とやさるるなしつく
去さうに同じ品に皆形て案をしに自筆と生物多くと
紙の者ト月に当るる多し紙れも後義明のそと
はく此自を去を曳を付筆を其伝て却もそもみの他
皆小其通り社伝ふれを差なしるるあるべし
○西吟を付るを見く出る大ふよし去あるる此あともつうかん
そのし案を面しと
作者法ふ見て曰を解るようしと皆初れとも作氣小

かゝるをやうしに付け和せるありあと作り付妻あり
ふもれのうそかくさるゝ甚むこれなくと云へ
遂て考るに成程左なる筋なるよしと云へとこのとむ川のく
ありさんまを名人とてもよれるを出を雲中見よりは
れる也夢通の作社会八幡宮なる事
○寧東より紀州へ来て机道を仕へ多者ある時風後の
作をは曰小國とある宗通の曰
家社者やうに作られてあけへ冷へ和
とて社翁の名ハ作られてのて社家潟てよむ事へ作れで
あけへ冷へおくとい（至宗確論あるんと云ふ説うるつまく

仁さ家左中のうもあるへとも和歌作大て疑を
祖翁を一宗乃主ふ於茶ゝて波きゝれを嬉ひゝて見
ゝ格の作あるゝ中ゝ紀抽を思へて流ふ説うるつれまゝ氣ゝを
同ゝ抽俗得ふ云かを赤ふまゝ者下山の御説乃曰
先能の家社者乃ゝ論大ふ遠へをやゝりまゝてよむ事ゝ
ゝ作ふで為ゝ経者とあるへ経者とありて伊の風情
ゝ作ふ是をゝつまて明まて社者のさゝふ心れまれる
まゝ打へとあり者大ゝ感ふをす事て経ゝゝれまを
を陸ふ拾あるゝまへ冷へ乃ゝを深切の説あゝ
○南蛮産を千崖ふ溝ゝ抽露舎ありて十々俗湾ゝ

前人集る所は意社二百貫ホかりて数百出せるものさに取
中されを後に三文の銭を給きて去んとする時吏一百貫
を持て連帰たられ居て呉能を論せきを白状定めに成ホ
出てより各を白状まち一の手吏ホ似合る式法ふやきて
明日糸屋の甚兵衛せんを式をうて分銭を相定る
各手連摩ホ付て名居ホまち白状張紙して金の白状を
見りむ銭拾の白状まちるる十倍せり俗の不勘より来り
て薬一名むとは城を官ホは城日名勘来と法る来を昨
脱若退出せられる後さに賊を付きて白状あ居
る元一時半ホて名勘能を呼て初めのかと

諸手一百ばかり踏置るる殺されす

○第に義白状薬一ら居ますと社ホ書留ホ白状る事あ
数十白状第一ホて門人に二人白つ出せ白状を法せる評
二人ホ吸ホて和ホ法あるる衆一座に二人白つなりとい
ちに捧る白状ホ白状ホ門ホ出る只ホ雪帝一多年社る
持白状百白ホ乃ホ有利

○吏八十家ホ居ホ中あ芝ホ能あ能潜の名後一なとも
ホ来ぬやうホなられる芝居の能潜を大ホ能象ホ社捌き
なるまて居ホ会ホ能ホ能潜と名人重の後退
ホ揮ホ経冊の考ホ能ホ服ホ筆ホして毛鑽の上ホ出ホ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕[illegible]やたゝこのふかき花ぞ[illegible]

[illegible]山をつゝみかぬけて秋の月

[illegible]て[illegible]ふかき中の雪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蒼虬翁遺事終

弘化二乙巳歳二月吉祥日

書林

京都　山城屋佐兵衛
仝　林芳兵衛
大阪　河内屋新助
仝　河内屋茂兵衛
若山　帶屋伊兵衛